

宇治川の先陣現代語訳

第一段

ころは正月二十日過ぎのことなので、ノ比良の高嶺、志賀の山、ノ昔ながらの長等山の雪も消え、ノ谷々の氷も解けて、ノ水はおりから増している。ノ白浪が激しくみなぎって流れ落ち、ノ早瀬の川底は大きく滝のような音をたてて、ノ逆巻いて流れる水も速かった。ノ夜はすでにほのぼのと明けて行くが、ノ川霧が深々と立ちこめて、ノ馬の毛色も鎧の色目もはつきり見えない。ノこのとき、大將軍九郎御曹司（義経）は、川端に進み出て、ノ水面を見渡して、ノ（部下の）人々の心（の中）を見ようとされたのであろうか、ノ「どうしよう、淀・一口へ回るのがよいだろうか、ノ水の引きぎわを待つのがよいだろうか。」とおっしゃると、ノ畠山が、その頃はまだ生年二十一歳になった者であったが、ノ進み出て申し上げたことは、ノ鎌倉で十分この川の御研究はございましたぞ。ノ（御曹司が今まで全く）御存知ない海や川が、ノ急に現れでもしましたのなるともかく。ノこの川は近江の湖の末流ですから、ノいくら待っても水は干上がりますまい。ノ橋板をまた、だれが架けてさしあげることができようか。（できません）。ノ治承の合戦のときに、ノ足利又太郎忠綱は、ノ鬼神として（川を馬で）渡ったのですか（そうではあるまい）。ノ私重忠が瀬の深浅を測ってみましょう。」と言って、ノ丹の党を主力にして、ノ五百余騎がびつたりとくつわを並べ（て今にも川に乗り入れようとす）る所に、ノ平等院の東北、橋の小島が崎から武者二騎がノ駆けさせ駆けさせ現れた。ノ一騎は梶原源景、ノ一騎は佐々木四郎高綱である。ノはたから見れば別に何とも見えなかったけれども、ノ内心では（二人とも）先陣を心懸けていたので、ノ梶原は佐々木より約二mほど前に出た。ノ佐々木四郎が「この川は西国一の大河ですぞ。ノ（馬の）腹帯が緩んで見えますのは（危険ですから、）ノお締めください。」と（言う）と、そう（言われて、）ノ梶原は、そのようなくともあるだろうと考えたのだろうか、ノ左右の鎧を外側に踏ん張り、（馬と腹との間を空けて、）ノ手綱を馬のたてがみに投げかけ、ノ腹帯を解いてしっかりと締めた。ノその間に佐々木はさつと（梶原の脇を）駆け抜けて、ノ川へざつと

（馬を）乗り入れた。ノ梶原は、だまされたと思つたのだろうか、ノすぐに続いて（馬を川に）乗り入れた。ノ「やあ佐々木殿、功名を得ようとして油断して失敗なさるな。ノ川底には大綱が（張つて）あるだろう。」と（梶原が）言つたので、ノ佐々木は太刀を抜いて、ノ馬の足にからまつた大綱をぶつぶつと切つては切つてはし、ノ生食という天下一の馬に乗つていたことではあり、ノ宇治川（の流れ）が速いといつても、ノ一直線にさつと渡つて、向かいの岸に上がる。ノ梶原が乗つていた磨墨は、ノ川の途中から斜めに押し流されて、ノはるか下流から上がった。ノ佐々木は、鎧を踏ん張つて立ち上がり、大声を張り上げて名乗つたことには、ノ「宇多天皇から九代目の子孫、ノ佐々木三郎秀義の四男、ノ佐々木四郎高綱が、ノ宇治川の先陣だぞ。ノ我こそ（相手をしよう）」と思う人々は、高綱と勝負しろ。」ノと言って、大声をあげて（敵陣へ）攻め入った。

第二段

畠山は、五百余騎で引き続いて（川を）渡る。ノ向かいの岸から山田次郎が放つ矢に、ノ畠山は、馬の額を深く射られて、ノ（馬が）弱つたので、川の中ほどから弓を杖のように突いて（水中に）下り立った。ノ岩に当たつて碎ける波が、甲の先の部分へざつと押ししかかつてきたけれども、ノ畠山は（氣にもせず、ノ水の底にもぐつて向かいの岸へ着いた。ノ（畠山が岸へ）上がろうとすると、ノ後ろから何者かがむずと引っぱつた。ノ「だれだ。」と問うと、ノ「重親です。」と答える。ノ「おお大串か。」ノ「そうです。」ノ大串次郎は、畠山にとっては烏帽子子であった。ノ（大串は）「あまりに水（の流れ）が速くて、ノ馬は押し流されました。ノ（私の）力が及ばないで、ノ（あなたに）お付き申しております。」と言つたので、ノ「いつもおまえたちは、ノ重忠のような者に助けられるようだな。」ノと（畠山は）言うと同時に、ノ大串を引つつかんで、岸の上へ投げ上げた。ノ投げ上げられて、（大串は）すぐに起き上がつて、ノ「武蔵国の住人大串次郎重親が、ノ宇治川の（徒歩での）先陣だぞ。」と名乗つた。ノ敵も味方もこれを聞いて、一度にどつと笑つた。